研究主題

「学び合い、学び続ける生徒の育成―学び合いの授業規律確立―」

主題設定の理由

平成 21 年度より行っている「学び合いの授業」を取り入れた授業改革・学校改革を行っている。6 年間の継続的な研修の成果として、教員の実感として学校全体が落ち着いてきたことや、子ども同士のけんかが減り、穏やかで自然な生活へと変化してきたことがあげられる。また、授業にグループ学習が多く取り入れられ、言語活動の活発化、コミュニケーション能力の育成へとつながった。しかし、授業の様子を改めて見直すと、4 人組の時に机がついていない。勝手に立ち歩く。言葉づかいが悪い。教室内が乱雑である。など基本的なことができていない状況である。また、教員側では、学び合いの授業の本質をとらえた授業づくりができていない状況である。

そこで、昨年度と引き続き、学び合いの授業に挑戦し続けるとともに、学び合いの授業における授業規律の確立を目指すこととした。

研究の概要

１、授業研究の手順

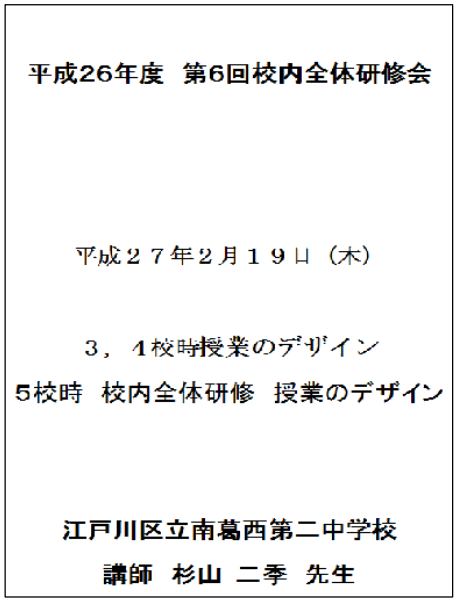
①授業研究日前の準備

3・4・5 校時の授業担当者は、授業のデザインを担当クラスの座席表とともに研修部に提出する。研修部で印刷をし、全職員に配布する。

②授業研究日当日

3・4 校時は普通通り授業を行い、外部講師と空き時間の教員数名が授業を巡回し、生徒の学びの様子を観察する。

5 校時については、一つのクラスのみを残して他のクラスは原則下校させ、全員で授業を見る。その際、だれが、どこのグループの生徒を見るかを決めておき、その生徒達の学んでいる様子をみる。生徒を下校させた後、研究協議会を行う。



平成26年度　第6回校内全体研修会

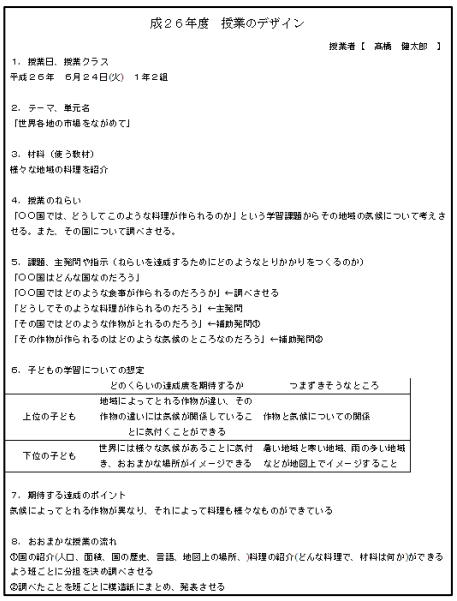
平成２７年２月１９日（木）

３，４校時授業のデザイン

5校時　校内全体研修　授業のデザイン

江戸川区立南葛西第二中学校

講師　杉山 二季　先生



成２６年度　授業のデザイン

授業者［　高橋　健太郎　］

1．授業日、授業クラス
平成２５年　５月２４日(火)　１年２組

2．テーマ、単元名
「世界各地の市場をながめて」

3．材料（使う教材）
様々な地域の料理を紹介

4．授業のねらい
「〇〇国では、どうしてこのような料理が作られるのか」という学習課題からその地域の気候について考えさせる。また、その国について調べさせる。

5．課題、主発問や指示（ねらいを達成するためにどのようなとりかかりをつくるのか）
「〇〇国はどんな国なのだろう」
「〇〇国ではどのような食事が作られるのだろうか」←調べさせる
「どうしてそのような料理が作られるのだろう」←主発問
「その国ではどのような作物がとれるのだろう」←補助発問①
「その作物が作られるのはどのような気候のところなのだろう」←補助発問②

6．子どもの学習についての想定

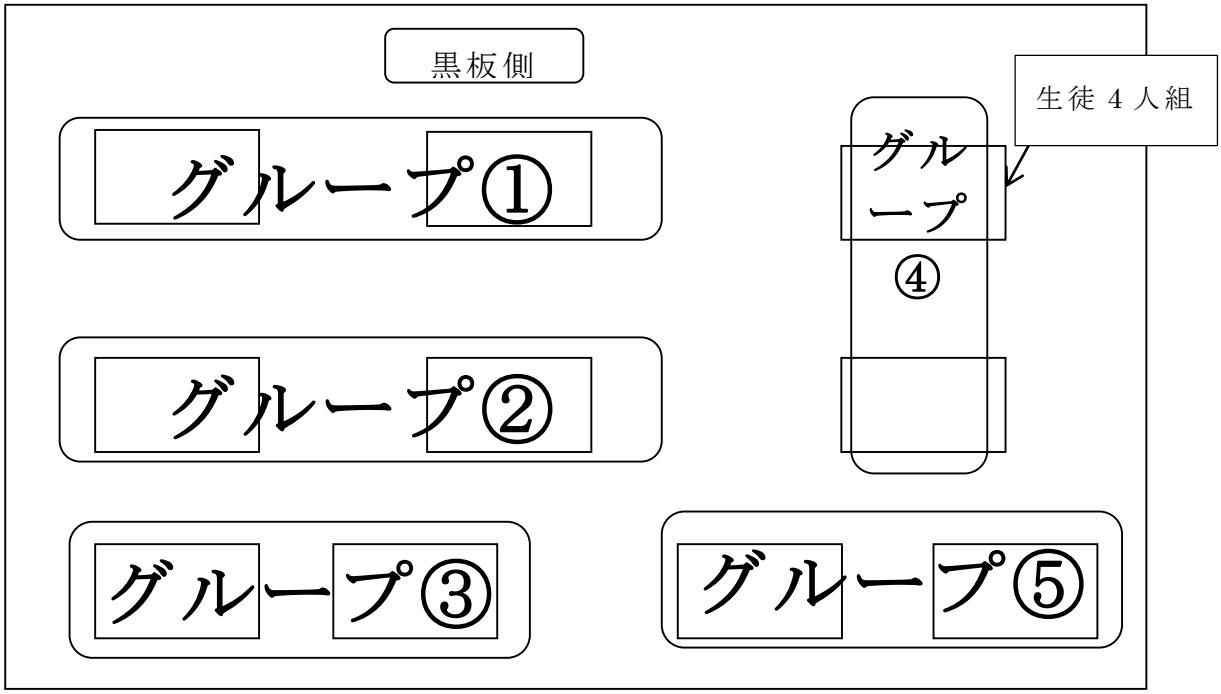
	どのくらいの達成度を期待するか	つまずきそうなところ
上位の子ども	地域によってとれる作物が違い、その作物の違いには気候が関係していることに気付くことができる	作物と気候についての関係
下位の子ども	世界には様々な気候があることに気付き、おおまかな場所がイメージできる	暑い地域と寒い地域、雨の多い地域などが地図上でイメージすること

7．期待する達成のポイント
気候によってとれる作物が異なり、それによって料理も様々なものができている

8．おおまかな授業の流れ
①国の紹介(人口、面積、国の歴史、言語、地図上の場所、)料理の紹介(どんな料理で、材料は何か)ができるよう班ごとに分担を決め調べさせる
②調べたことを班ごとに模造紙にまとめ、発表させる

③研究協議会

授業者から、本時の説明と自評のあと、観察したグループごとに語り合い、子どもの姿から学び合った。語り合う内容は、「子どもがどこで学んでいたか」「どこで学びが滞ったか」子どもの学ぶ様子から何を学んだか」を中心に行った。



２、授業研究における外部講師の活用

昨年度に引き続き、東京大学助教杉山二季先生に、年間を通して講師をお願いし、授業研究の専門的な助言をお願いした。杉山先生が都合のつかなかった1回は、江戸川区内で学び合いの授業を先駆的に取り入れ、学び合いの授業を長年創り上げている二之江中学校主幹教諭土屋純一先生にもご助言をいただいた。

３、授業研究会の継続

以下の表の通り、授業研究を5回行った。

日時	教科・授業者・テーマ	講師
平成26年5月28日	3年国語・草場有希子・登場人物の心情変化をとらえ説明する	杉山二季先生
平成26年9月24日	3年社会（公民）・山田人也・国の政治のしくみ	杉山二季先生
平成26年10月15日	1年英語・笹木健一朗・What do you~?	土屋純一先生
平成26年11月26日	学年別授業ビデオ研修会 1年道徳・千葉裕平／2年理科・山根尚子／3年理科・小貝宏	なし
平成27年2月19日	2年理科・山根尚子・雲のでき方	杉山二季先生

1年英語・笹木先生の授業　4人組で学び合う生徒の姿

４、学び合い授業の理論

授業研究の前に、学び合い授業の理論について、杉山二季先生よりご講演いただいた。また、その際事前に杉山先生に聞きたいことをアンケートにとっておき回答していただいた。

１、なぜ学校ぐるみで「学び合い」の授業をするのか？（再確認）

⇒子どもたちにとって将来が見えにくく、自分の人生を切り開いていけるのかという不安がある。授業を子ども自身が学びかかわる場にすることが必要ではないか。安心して学べる土台としての学びの作法を徹底することと聴きあうグループの育成は全教科の授業で進めていかないと定着しにくい。子どもの学びを引き出す授業のデザインは、すべての教師で研究を続けないと生み出しにくい。よって学校ぐるみで「学び合い」の授業をする必要がある。

２、「学び合い」のイメージをもつ。（本校新任者のため）

⇒教え方ではなく、学ばせ方を考える。1 時間の授業で、子どもは本当に学んでいるのか？学び合うことで一人一人の学びが深まる。すべての子どもたちが学べる場になっているのか。このことを常に問うていく。

３、学び合い授業の「課題作り」をどうするか？（アンケートで一番多かった質問）

⇒授業のねらいをはっきりさせ、本時のメイン課題を設定する。それをどんな活動をとおして学ばせるかを考える。

５、授業規律に関して

授業研究を通して授業規律について語られた内容は以下のようなものである。

・4 人組の机をつけるために、かばんを横にかけない。

・4 人組の時に、机をぴったりとつける。

・4 人組で話し合う時、筆箱が邪魔になっている。

・全員で意見を共有するとき、発表している人の方を見る。

・わからないことがあったら、仲間に訊ねるときの聴き方・応え方。

授業研究のたびに、目指すべき授業規律について交流をし、確認をした。

成果と課題

年度途中で、以上のような授業研究について、マンネリ化しているのではないか？本当に効果はあるのか？という不安の声が聞かれることになってしまった。そこで、この学び方を取り入れた原点に戻り、平成 21 年度導入した当時の教務主任柴崎啓一郎先生から話を聴き、全員で話し合いをすることとなった。

本校にこの学び方を取り入れた経緯は、その当時、「学びから逃避している生徒が多すぎる」という現状、一斉授業の限界、競争・選別でつぶすことの多い教育を憂いて、一人残らず参加する授業づくりのために取り入れたとのことであった。

話し合いの中で、授業研究を通して、「学び合い」の授業を位置付けたことによる良い面について多く語られることとなった。

・4 人組で、教師の働きかけがなくても、自然に声をかけあっている生徒の姿がある。

・3 年間学び合いの授業を進めることで、他者理解が進み、互いを尊重する姿がみられるようになった。

・僅かではあるが、学力面でも上昇がみられた。

・人間関係が良好になり、けんかやいじめが少なくなった。

以上のような意見が出され、課題作りが難しい、特別支援生徒への配慮はどうするかなどの課題はあるが、「学び合い」の授業を継続し、授業研究についても同様に行うことを決定した。授業規律については、次年度への課題として引き継ぐこととした。

生徒からの意見について、きちんとしたアンケートなどとっていないが、4 人組でわからないところを聴くことができるので安心であるとか、いろいろな意見を 4 人組で交換し、深く楽しく学ぶことができたという意見が多く聞かれた。

今後もこの方法での授業づくり・授業研究を継続するとともに、さらに授業規律の確立と各教科の真正の学びに近づくような授業を展開していきたい。

（文責　浅井直美）